青梅市文化財ニュース

第２２２号

平成１８年４月１５日
発行　青梅市文化財保護指導員連絡協議会
青梅市郷土博物館
（青梅市駒木町 1-684　℡0428-23-6859）

御　嶽　講

武蔵御嶽神社に登る石段両脇には、講名の記された数多くの記念碑が建てられています。御嶽はかつて金峰山蔵王権現（きんぷせんざおうごんげん）などと呼ばれ、山桜の名所として知られる奈良県吉野の金峯寺を勧請し、関東における蔵王信仰の中心地として知られていたようです。今のケーブルカー御岳山駅辺りは、天保５年(1834)に出された江戸から御嶽までの道中記「御嶽菅笠」にも、富士峰千本桜として紹介されこの時季山桜が咲き誇っていた事でしょう。また、これから５月にかけて御嶽は春山といわれ、講の参拝が集中します。

武蔵御嶽神社は江戸中頃から庶民が講を組織し、その参拝やお札の配札で運営されてきました。各地区の信仰組織である講の活動は、地区や御師（おし)により一様ではありませんが､おおよその古い姿をご紹介します。

それぞれの講には決まった御師がいます。御師は御嶽の信仰の布教拡大を図り、各地区に講を組織させ、お札の配布や参拝時には宿の提供、神社案内や先達（せんだつ）の育成などを行っていました。江戸時代の神職では行えなかった様々な営業活動をし、神職家（社家（しゃけ））と御師は本来別の位置づけをされていました。講組織の記録は、御師の講廻り帳や参拝講控え、講の代表者（講元（こうもと）または先達）が持つ講員名簿や代参帳などが主で、正確なところは不明ですが、元禄年間（1688～1704）頃より始まり寛政年間(1789～1801)には関東一円に広まります。講は昔の字（あざ）などを単位として、講元を中心に世話人といわれる会計庶務などを担当する役員と講員数名から数十名で組織されています。運営は毎年講員から少しずつ積み立て（講金）をします、そして講員の中から籤（くじ）などで皆を代表して神社に参拝する代参人を選びます。

代参人は講金で御嶽に参り､まず御師の家に寄り代参帳に記された賄(まかな)い料(坊入(ぼういれ))やお札料を御師に収め､神社に参拝します。その後御師の宿に戻り、各地区より訪れた代参者達が一同に会します。そこでは地区ごとの話がでて、交流の場ともなります。作物の種を持ち寄ったという話もあり、干ばつや大水、台風や害虫に強い品種の情報を提供し

（裏面に続く）

あい、実生活にも役だった参拝になったと思われます。そして御師よりお札を全講員の数いただき地元に帰ります。

戻ると「お日待ち」といって代参人の家に（最近は自治会館など）講員が集まり、御札を配りながら御嶽での話に興じます。個人の旅行など考えられなかった当時、少人数の代参人をたて、信仰と娯楽、さらには大きな情報源でもある講参りは、庶民の暮らしが楽になるに従い爆発的に広まったようです。

各御師の講の分布を見ると大まかに埼玉方面、東京方面、神奈川方面に分散していますが、現在の市町村単位でまとまって一軒の御師が受け持っていることはなく、数軒の御師の講が存在しています。一概にいえませんが、講を広めるに当たり御師数人が協同で拡張していったと考えられます。そして、各御師の講は青梅より遠方に向かって線上に分布しています。

秋から冬にかけて、御師はお札を各講員一軒一軒配札して廻ります。その際、青梅から講元などの家を拠点に少しずつ遠くに廻って行ったようです。今は業者により奉製されるお札も、かつては手刷りの紙札でした。今でも、講元の家に札の版木が残されているところもあります。車も電車も無かった当時歩いて廻った事が、比較的直線距離で各御師の講が分布している事でわかります。

今日では代参でなく講全員での参拝、あるいは配札だけ、代参だけといったかたちもありますが、いまだに講の運営は続けられています。このように御師が本来の活動を続けているのは、日本中で武蔵御嶽神社以外は無くなりました。これは各講員の信仰心の厚さと文化に対する理解、さらには御嶽の御師の地道な活動によるものです。「御嶽菅笠」にも山上御師の家が紹介されていますが、当時から無くなっている家はわずか6軒、まだ32軒の御師が現役で講活動を続けています。

（文責　須崎直洋）